
電池

そらみみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電池

【NNコード】

N9568C

【作者名】

そらみみ

【あらすじ】

事故だったのか戦争だったのか。僕が目覚めると街が消えていた。誰もいない、死体も無い街を僕はさまでう。廃墟の研究所で出会ったロボットの彼女。世界には奇妙な二人だけだった。

出会い

事故だつたのか、戦争だつたのか今となつては知るよしもないが
ある朝目覚めると辺り一面めちゃくちゃで、どうやら生きているの
は僕一人のようだつた。

こういう時はおきまりのよつて「じりや夢だ なんて考えていたん
だが

どうやら確固たる現実らしい と認識したのはそれから1週間位経
つてからだつた。

そんなに時間がかかつたのは死体が一つもなかつたのも原因だと
思う。

なんで死体が無いのかとか考えたけど 結局わからないまま。
もともと両親共に早くになくし、天涯孤独の身の上だつたし
なにより 親しい友人知人なんてものはいなかつた僕にとっては
変な話 あまり日常は
変わらなかつたりした。

あんなに大勢いた人間も僕一人になつてみると 自然の恵みだけ
で 食べるものはなんとでも
なつた。街がこんなにめちゃくちゃなのに山や川は急速に元に戻つ
ていつた。陳腐な感想だが
自然の驚異とか思つた。

「ラツキ 塩みつけ」

倒壊したかつてコンビニだつた建物から塩の他、いろいろな調味料
を拝借。

釣具屋や銃砲店から狩りの道具を失敬して動物性タンパク質の確保
も比較的容易に

出来るようになつたが 人間贅沢な物で こんな状態でも調味料と

か探して美味しくいただこうと努力しちゃうようだ。

僕はサバイバルの得意な強い人間なんかじゃない。対人関係が苦

手な半引きこもりだったが

他人がいないのだ。世界全部が僕の部屋みたいなものだった。

僕の日課は冒険だった。冒険といつてもたいしたことじゃなく、ただ崩れたデパートやコンビニ

その他の建物に入つて まだ使えそうな物をちょっと借りてくるだけの事なのが。

よくマンガなんかでは 律儀にお金を誰もいないレジに置いてくるというシーンがあつたが

生憎手持ちがそんなに無かつたし、そもそも銀行が稼働していたとしても貯金もそれほどあるわけじやなかつた。だから自分への言い訳のため、品物は全て借りる という事にしていた。

照りつける太陽。山の向こうから立ち上る入道雲。蝉たちが短い生を謳歌するために激しく鳴いている。僕は夏に何故か少しもの悲しさを覚える。

自分の生まれ育つた街からだいぶ離れた所まで来たと思う。僕はただ目的地もなく ただ歩き続けている。そうしていればいつかこの世界が何故こうなつてしまつたのか何かヒントになるような物があるかもしれないし、ますなにより何かをしていたかったからだ。

少し町並みからはずれて山に登つていく道を歩くことにした。昔からそうだった。僕はどこに続いているのかわからない脇道に入つていくのが好きだった。

緩やかな坂道を瓦礫と化した街並みを見下ろしながらゆっくりと上つしていく。蝉がこんなに鳴いているのに何故か 静けさを感じる。山といつても少々小高い丘ぐらいだったのですぐに頂上に着いた。

何かの研究所らしい建物が見えた。こういう建物には実際に生活

に役立つ物はあまり無いと今までの廃墟めぐりで経験してきた
が、なんだか好奇心から中を覗いてみようと思つた。

ガラスが全て割れてしまつていて 壁の一部はどこから来たのや
ら 成長の早い薦が取り付きだしておりちょっと不気味な感じもし
たのだが 死体も消えてしまうようなこの世界なら 幽霊なんて出
るわけ無いな とか根拠のない感想を持つたりした。

建物の中はそんなに崩れてはいなかつた。大きな窓が多く、陽の
光が結構奥まで届いており壁から何から真っ白だつたこともあり、
思いの外 明るい。

こんな世界になつて最初の頃は 何処かで生きている誰かに会う
んじやないだろうか？ と希望とも恐れともつかぬ思いをもつて探
索していたものだが、最近では 誰もいるわけ無いと ビービーと
奥に進んでいく。

隅から順に各部屋を覗いていく。どの部屋も大きなコンピュータ
や、複雑な設計図らしきもの

造りかけの何かの部品が沢山転がつており、ビツや工業用ロボッ
トや新型の車、そんな様な物を設計、製造する研究所のようだつた。
そんな最先端の研究も 今の僕にはまったく役に立たないものだつ
たりするのは、なんだか皮肉を具現化して見ているようで ちよ
と変な笑いが出た。

「だめだな、こりや。」

思わず独り言をいい、その声が瓦礫の山や、機械部品に吸い込まれ
ていくのを聞いていると なんだか無性にむなしくなつてきた。

次の部屋を最後にしようと扉を開けたとき 目の隅に今までの状況
からするとあり得ない物が引っかかつた。

「え？ 女の人の顔？」

崩れて山になつた元壁だつた物の隙間から 眼を閉じた 黒髪の女の顔がこちらを向いていた。

「うえ？ まじで？」

意味のない独り言をいいながら、そちらに近づく。見間違えじゃない、確かに女の人の顔だ。今まで生存者はおろか、死体さえ見つけることは無かつたのに、こりやなにかの間違いだろうと思いつながらも確認するために顔が埋もれている瓦礫を崩れないようにゆっくりとくどけていった。

瓦礫の下からは女人の全身が現れてくれた。顔だけじゃなくつてちょっと僕はホッとする。

あらかたどけてしまつと謎が解けた。その女人の右腕は何処かへとれてしまつていたのだが

そこから精密な機械部品が見えたのだ。

「ロボットがあ」

残念なような、そして今までのルールが破られなかつた事に安心したような、そんな気持ちが僕を包む。

ここまで掘り出したのだからと僕は好奇心からそれを瓦礫の山から引っ張り出した。

それは中身は金属で出来ているのだろうが、外側はまるで本物の人間のような肌触りだつた。

そして意外なほど軽かつた。

「さて、と。」

引っ張り出したそれを床に横たえ、改めて見てみると まるで本物の人間の様に見える。

腰まである長い黒髪に色白の肌、睫毛まで生えている。病院の患者が着るような白いワンピースを着ているが、それは埋まっていた為にみすぼらしく汚れている。

整った顔立ちと 壁が崩れてきたときに取れてしまったのだろう千切れた右腕がアンバランスだ。

外見上でそれがロボットだと伝えてくるのは、その無くなつた右腕と 引っ張り出す時に見つけたのだが、うなじにある何かを差し込む為のような金属が見えている箇所だけだ。

「よくできてるなあ。」

僕はそう言いながら ちょっとこれを動かしてみたいと思った。
でも右腕は壊れているし、なにより精密機械だから瓦礫に埋もれたときのショックで外からは見えないところが壊れているかもしれない。多分動かないだろうな と半分諦めながらも見えるところにスイッチでもないものかと探してみたが、それらしい物は見つけられなかつた。

ひょっとするとワンピースに隠れた場所にスイッチはあるんじゃないかとか思つたけど何となくロボットとはいえ、若い女人の姿をしたものだ、服の下を探すのはなんだかはばかられた。

「？」

腕組みをして さてどうしよう と考えている僕の目に瓦礫の中に外からの光を反射して光る金属の部品が入ってきた。他にもなんだかわからないがらくたは沢山そこらに転がっているのだがなぜかその部品だけは僕の意識を引いた。

「ひょっとして これかな？」

そう、ロボットを引っ張り出すときに気がついた首の後ろの窪み、そこにぴったりとおさまるそうな形状をその部品はしていた。

僕は駄目元でその部品をそのロボットのうなじからセッティングしてみた。

かちっ

金具と金具がしつかりとはまる音がする。

僕は息を詰めて見守った。

ピッ

短い電子音がした。

「まだ壊れてなかつたんだ。」

ちょっととした期待と不安でロボットが動き出すのを待つた。

5分位経つんだろうか、最初の電子音以来 音もしなければ動きもしない。

「やつぱり駄目かあ」

僕がしようがないかとしゃがみ込んでいた体勢から立ち上がりかけたその時

ピクッ

まぶたが動いた気がした。じつとその立ち上がりかけた体勢のまま見守っていると ゆっくりとゆっくりとまぶたが開いていく。その瞳が僕を観る。

「ハセキハ

細いが 凜とした 通る声。

「ハセキ こんなにちわ。」

いきなりの挨拶に僕はびきまぎしながら返事をする。
が、きっとプログラム通りに電源に入るといついつ風にまばたき挨拶をするのだろうと思いつゝ直し次の動きを見守る。

「あなたはだれですか？」

会話が出来るほど高等なロボットなんて出来ていたのか?と疑問符を頭に浮かべながら

「ケンジと言います

と 一応返してみる。

「ケンジさん はじめまして 私はアオイと言います。」

よくできた会話プログラムだと思う。聞き取った名前を並びはめて自動的に返すのだろう。

「ところで何故サクラダラボはこんなに崩れているのですか?何が起きたのですか?」

「?.

え、周りの状況を加味した上で質問？自分で考てるのか？と驚きつつもなんとか返事をする

「僕が目覚めるというなつていたんだ。そう、ちょうど君が今日覚めて周りの状況がわからないように、僕もわからない。」

なんてことだ、このロボットはまるで意識があるように振る舞う。僕は驚きつつもいくつかの質問に答えていった。答えたといつてもほとんどのことは僕もわからない事だったのだが。

彼女は、ロボットに性別があればだが、見た目が女性だから便宜上こういうが、この研究所サクラダラボで人工知能の研究の為に創られたロボットであることがわかつた。

赤ちゃんのような状態で創られ、人間と同じ時間をかけて成長してきた人工知能だということだった。現実世界のフィードバックが人間と同じ知能を創る為には必要だと考えられたためこのような現実の身体を与えられているそうだ。正直根からの文系の僕には説明してくれた事のほとんどが理解不能だったのだが、まあ大体そういうことらしい。

千切れた右腕を意識していないとまるで本物の人間と会話をしているようだな、と考えていると僕の視線の先をみてまるで今気づいたように

「右腕 とれる。」

と他人事のようにつぶやいた。

僕は正直困っていた。興味本位で電源をいれたのはいいものの、このままこのロボットをここに置き去りにしていいものかどうか判断できなかつた。

「外の世界を見てみたいのです。一緒に行つては駄目ですか？」

僕の考えを見透かすように彼女は聞いてきた。

とりあえず断る理由もないのに僕は了解した。
奇妙な連れが 僕に出来た。

「外に出る前にいくつか持つていきたい物があるのですが。」

ロボットの身支度。まさか着替えとか言ひんじゃないだろうな とか訝しんでいると

「電池です。ケンジさんが私にセットしてくれた物と同じ物がまだいくつかこの部屋にあるはずなんですが。」

そこで初めて僕がはめ込んだ部品が電池だったのだとわかった。電池は彼女が埋もれていた場所の近くに小さなトランクに入つてあつた。中を開けてみると12個の窪みがありそのうち11個に僕が彼女のうなじにはめ込んだのと同じ部品が入つていた。空いている1個の空間は今彼女のうなじにはまつている物だろう。彼女の上に壁が崩れてきた時に電池が外れ、動けなくなつていたのだろうと考えた。

彼女は残つてゐる左腕でその電池が入つた小さなトランクを持つと

「お待たせしました。」

とだけ言い、僕の後ろに立つた。

出会い（後書き）

すみません。

この小説、まだ書き続けてもいいもんでしょうか？
書きたいから書いてますが、僕の語りかけは誰かに『届くのでしょうか？

彼女

サクラダラボから外に出ると陽はやや傾いていた。

「何処に向かっているんですか？」

ロボットが聞いてくる。

「特に何処ってわけじゃないんだ。ここじゃない何処かには何かあるんじゃないかなって
それで旅つてのかな、歩いて来たんだよ。この研究所を見つけたのも偶然でさ。」

と僕。ロボットは そななだ つて感じの顔をしてうつと頷く。
そして

「目的地のない旅つてのもいいですね。」

と、なんだかわかるような わからぬような 感想を口にした。

「それじゃ、先ず私の行つてみたい所、いいですか？」

ロボットの行つてみたい所? ちょっと想像できないな とか考え込んでいると
もう先に立つて歩き始めた。

「ねえ、何処に行くの?」

後を追い話しかける。

「アオイって呼んでください。田原めたときにもいましたが、私はアオイと呼ばれています。」

そう言われて名前で呼ぼうとしたと躊躇ついた。「アオイさん？ アオイちゃん？ はたまたアオイと呼び捨て？」

それが一番しつづくるのだろう。とつあんず無難に

「あー、アオイさん、いったい何処に行くのかな？」

と呼ぶことにする。ロボットはそれだけも、なんだか変な感じだ。

「デパートです。」

意外な返事だった。

「デパート？」

思わず聞き返す。

「そう、デパートです。」

ロボットがデパートに向の用だ？と思つてみると、謎問が顔に出でいたのか

「服を着替えたいんです。身なりはきちんと、清潔な服を着のよつて教えてくれます。」

と答えてくれた。

「私、埋まっていたでしょ？ぼろぼろになつたこの服、着替えた
いんです。誰もいないと聞きましたが、他人の家から貰つてくるの
も気がとがめるし。それにデパートならサイズもいろいろあるでし
ょうから。」

他人の家から貰うのも、デパートから貰うのもんまり変わらない
んじゃないだろかとか思つたが、サイズの面ではなるほどと思つた
ので一応納得しておいた。

「この街のデパートはまだ誰もいなくなる前、何度も行った事があ
ります。実験の一環でですが。沢山洋服があつて楽しかったのを覚
えていました。」

とロボットは楽しそうに話す。楽しいとか、本当にそんな感情があ
るんだろうか？とか考えたがそれを証明するのは例え相手が本物の
人間でも無理だと思い、考え続けるのはやめにしておいた。

街はあまり大きくなかった。駅からまっすぐに延びる大通り、
その両側にファッショントビルやデパートが建ち並び、それに平行す
るようにアーケードの商店街が通つていた。大通りの端に立つと街
の全景が見渡せる位の規模だ。少し前ならここも沢山の人で溢れて
いたのだろうが、今は僕達意外動く物もない。

デパートに向かう間、ロボットに何故誰もいなくなつてしまつた
のかについてまた質問されたが今まで歩いてきた中には答えはある
が、ヒントさえ見つけられなかつたので結局何もわからないという
結論しか出なかつた。

「それにしても機能停止したボディ一つさえ見つけられないのも不
思議ですね。」

「機能停止？ああ、死体の事？そうだね、研究所に来るまでも一度

も見なかつたよ。本当に訳がわからないんだ、一体全体何がおきたのか。」

そう僕が答えたとき、ちゅうじょトパートにたどり着きその話はそこまでとなつた。

「いの入り口からは入つていけそつですね。」

比較的原型をとどめているデパートの北側の入り口から中に入ることにした。

手回し式の発電もできる懐中電灯は一つしか持つてなかつたので僕は自分の探索は後にして先ずはロボットと一緒に服を探すことになった。

止まつてしまつているエスカレータを上り2階へ上るといは若者向けの洋服を卖つてているフロアーダつた。

「こんな所ぢやんと見て廻つた事ないよ。」

半引きこもりだつた僕には当然、彼女なんていふことがなく誰かといつしょに洋服を選ぶなんてしたことが無かつた。

ロボットはちょっと迷つて、いろいろなお店を見て回つていただが最終的にはあまり奇抜ではなく落ち着いた服が多くあるお店に決めたようだつた。

店名を懐中電灯でてらしてみたが、崩した字体で書かれており、ブランド等には疎い僕にはなんて読むのかわからない。

「これなんてどうぞつか?」

ロボットは今着ていいワンドピースとかまだ変わらない服を広げて自分にあてている。

正直いつこう時なんて言つていいのかわからず

「いいんじゃない?」

とだけ答えた。困った。僕はなんだかあらぬ方向を見る。

「これにします。」

僕の返事で決めたのかそれとも僕の意見なんてもともとじづりでもよかつたのかわからないがロボットはそのワンピースが気に入つたようでなんだか声ははずんでいた。

さて次は地下にでも下りて食料でも探そうかと声をかけようとボットの方を振り向くとロボットはそこでもう着替えはじめていた。ロボットとはい、一応女の人の姿だ。なんだか見ちゃいけないような気がして僕は後ろを向いていた。

後ろで着替える時の衣擦れの音がする。そういうや片腕なのにうまく着替えられるのだろうか?とか思ったのだがだからといって着替えを手伝つのもなんだか恥ずかしく思い、ロボットにそんな風に思つてしまふ僕はちょっとおかしいのではなんて考えてもいた。

「着替え終わりましたよ。私はこれで満足です。ケンジさんは何がデパートで見ていく物はありますか?」

片腕でも器用に着替えられたようだ。なんて呼ぶ種類の洋服かは知らなかつたが、袖のない肩の出ている軽そうな白いワンピースだつた。ちょっとドキリとして、そんな自分はやっぱりおかしいのかとまた思つたりした。僕はなんだか変な顔をしていたのだろう

「どうしましたか?」

とロボットが聞いてきた。ロボットの彼女に対してなんだかドキリとした自分が恥ずかしく、地下で食料品を確保したいと伝えて、足早にその店をでてエスカレーターを下っていく。

「あ、待ってください。」

明かりには僕しか持つていなかつた。彼女は駆け足で僕の後についた。

人間、というか生き物は食事をしないと生きていけないと言う事は知つてゐるのだろう、僕がまだ食べられる保存食料や調味料、缶詰等をリユックに詰めているのを見つけても特に質問されることは無かつた。僕はふと、今は夏だから自然の恵みをふんだんに得ることができるのが初めて迎える冬はどうして行けばいいのだろうか?と不安になつたのだが、そのうち本屋で保存食の作り方の載つているアウトドアの教本でも探してみよう等と考えていた。

夜になつた。寝る場所をいろいろ探したが、結局神社のお社に決定した。

コンクリートのビル内ではなんだか寝てゐる間に倒壊しそうで怖かつたし、こういう時は木造の建物の方が強い気がしていたからだ。神社の境内でたき火をおこし、今日デパートで見つけてきた缶詰を食べる。ふとロボットの方を見てみたら僕を見ている。

「どうかした?」

僕が聞くと

「おいしいですか？」

と質問された。缶詰だ、特に缶詰でも不味くもない。そのまま答えると

「私はおいしいとかおいしくないとか、わかりません。そのまま研究が進んでいたら私にもわかるようになつたのでしょうか？」

となんだか悲しそうな顔をした。ここまで自然な行動が出来るロボットが創れる技術があつたのだ、何時かは味覚も感じられるようになつたかも知れない。

「君と一緒に物を食べて、感想を聞いてみたかったな。」

なんとなく、僕はそう答えてから彼女が少しかわいそうだなと思つた。

食事も終わるとする事もなくなり、時間は早いけどもつゝ寝ようつとことになつた。

そういうば口ボットも寝るのだろうか？と疑問が浮かんだので聞いてみると

「実際は寝なくても平氣ですが、電池の節約と人間と共に生活する事を考えて 眠くなるようにプログラムされています。」

との事だった。聞いてみると 少し眠くなっているとの事だった
ので2人、神社のお社の板の間で横になつて眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9568c/>

電池

2010年10月26日02時48分発行